

稽古のなり方 その二

このシリーズは古来の剣道の教えを紹介・解説し、今の私達の修行・指導に活かそうという試みである。前回は「百錬自得」、「懸かる稽古をせよ」、「懸待一致」を紹介した。編集部員の剣道修行の中で今まで得た経験と知識を総動員し、決して借り物の言葉でなく、自分たちの身の丈、身幅の言葉で綴ったものである。従って諸処に思い違いや解釈の違いなどがあるかもしれない。しかし各自の長い修練から得たものである。よろしく参考にして頂ければこれに勝る幸せはない。

稽古は願うもの

古い世代には言わずもがなであろうが、稽古は「お願いする」ものだ。今でも稽古の前には必ず「お願いします」と言う。かの昭和の剣聖持田盛二範士十段に師事した小川忠太郎範士九段の稽古日誌である著書『百回稽古』には、稽古をすることを単に「願う」と表現している。本来稽古は師匠、先輩に懸かるもの。先達であるからには豊富な経験、深い剣理、高い気位を持っている。それを「いただく」気持ちで自分の全てを出し尽くして懸かるもの。よし先達が高齢で足腰弱く打ち込みを

頂くことがかなわずとも、その氣と玄妙の技を頂くべく一足一刀の間から渾身の一打を打ち込むべきである。間違っても打ってやろう、返してやろう等の考えを抱くべきでない。長年鍛錬された先達ほどそういう剣境ではないはずである。八十代の範士九段に新

進気鋭の若手八段が為す術もなく捌かれるのを見て、剣道の奥深さを感じた方もおられる。懸かり手は元に立つ上手の気位、理合のレベルまで我が氣と剣理を無理しても引き上げて、そこで練るのである。もちろん「背伸び」をしているのであるからほとんど乗られ、返され、捌かれるばかりであろうが、稽古が終

わった後は全力を尽くした清涼感と何かを学んだ充実感を得られるであろう。そして確実に地力がつくはずだ。そのことは、後で逆に下手や同位の者と稽古したときにわかる。剣道は「打たれて強くなる」と言う。つまり上手に良く打たれて学ばないことには自分自身の良い打ちは未来永劫身に付くはずはないの道理である。最近の学生や、驚くことに子供たちでさえも、師匠格の上手と稽古するとき、打たせて取ろうとしたり、待たせて返そうとする「一本勝負ごっこ？」をやり始める者

虚実を知る

虚とは構え、体勢、心に隙があり氣迫が不十分な状態であり、ここは打ち込む好機である。実とはその逆で身の構え、心の構え共に磐石の充実であり、ここに不十分な攻めで打ち込んで敵わぬばかりか先の技、後の先の技で討ち取られるのは必定であろう。虚に虚、つまり相手も我が方も心身共に不十分な状態では豆腐と豆腐をぶつけ合うようなもの、軟弱に身崩れするばかりで共倒れ、そもそも剣道にならない。実に実、これは双方十分な体勢で相まみえる緊張の立ち会い。これはいわば固い石と石をぶつけ合うようなもの。火花は散るかも知れないがどちらも欠けずに勝負はつかない。同程度の地力の剣士同士が裂帛の気合でいささかも氣を抜かず立ち会えば正に実に実の勝負なし。ではどうするか。古人先人は相手の実を虚に変えて、虚に

が在る。果ては上手が攻めていくと退いて、打つと避ける。一向に稽古は咬み合わず中身がない、従って地力がつかない。そうでないしっかりした稽古をする者も多いのを見ると、やはりこれは指導者の稽古観によるものであろう。この一方で引き立て稽古や互角稽古の考え方もあるが基本的には稽古は「願う」ものであることを肝に銘じたい。

支部紹介

牛深

福本 高志

天草剣道連盟となり、早いもので三年が経とうとしておりますが、これまでの三年間を振り返り思うことをいくつか挙げたいと思います。牛深地区では、合併前まで社会人参加の試合が。春の旧市町對抗熊日旗、牛深・阿久根・長島の三地区で開催される三地区親善体育大会、子ども達と一緒に参加する県会長旗、そして県民体育祭と四つの試合は欠かさず参加してまいりました。三地区親善体育大会は、これまで五十六回開催されて

おり、長い歴史もあり、毎年牛深の剣道愛好家も楽しみにしている大会でもあります。また、県民体育祭においては、他の試合と違い練習に熱が入り、まわりの応援・サポートもあり、団結して試合に臨んでいたと記憶しております。天草剣道連盟になってからは、県民体育祭も選抜となり、他のチームに引けをとらないメンバーとなりましたが、天草全域から選手が集まり練習するととなると、なかなか都合がつかない選手もいたのではないかと思います。合併しましたので、天草は一つという気持ちでベストメンバーを選び、良い成績を収めることは、天草剣道連盟にとっても良いことかもしれません。旧市町対抗で行い、多くの会員が

天草市代表としての出場をかけて稽古に励み、競い合った方が良いのではないかと思いますし、同様の意見を耳にすることもあります。「剣道の理念」、「剣道修練の心構え」には、「修練」という言葉がありますが、修練を行うこと、修練を行う場をつくること、今の天草剣道連盟には足りないのではないかと感じております。当然、会員自体の意識が一番大切でありますし、合併により通勤に時間を要したり、転居したりとなかなか時間が作れないのも現状です。それ故、天草剣道連盟としても会員が気軽に稽古できるための環境づくりを考えていかなければならないと思います。

玉龍旗審判体験記

益田 克法

毎年七月二十五日から二十九日まで開催される玉龍旗剣道大会に、六年振り二回目の審判として福岡に行ってきた。天草からは木下文男先生と私の二人だった。私は女子の部の二日間だけの審判だったが、木下先生は何と全日程の五日間を審判漬けだったと言った。驚く。試合前日に審判会議があり、平成二十年から実施された高体連のいわゆる鏢競り合いの「十秒ルール」の説明があった。この事については私自身剣道雑誌の

特集を精読して勉強したが、内心かなり不安で初日の審判に臨んだ。試合が始まると高校剣士達はかなり指導が徹底しており、正しい鏢競り合い、十秒内の油断のない別れ、そして機を見ての引き技と、試合の展開はきびきびとしており、むしろ審判としては以前よりやりやすいと感じた。私自身が鍛えられたのは「十秒ルール」や有効打突の見極めもさることながら、むしろ審判の「位置取り」だった。試合者を中心にした三人